説話文学の文章の研究（二）

土屋博映

1　はじめに

文章・文体という領域が、国語学の中でも研究のおくれた分野であることは、前年度の紀要にのべた。私自身の勉強不足ということもあって、調査を続けていく上で、ああかこうかと迷うことしばし、である。試行錯誤の連続であって、とにかく大変なものにとり組んだという感慨を抱く今日この頃、それでもこの文章・文体という怪物、説話文学の文章の流れを解明すべく、今回も紀要に投稿させていただく。

微に入り、細を穿つ以前に、まず『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の比較から、それぞれの特徴たる個性をできるだけ把握するのが、当面の目標である。

2　『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』

管見によれば、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』で、ほぼ類話と考えられるものは、五十七話であった。本稿では前年度の紀要にひき続き、『今昔物語集』本朝の部の巻二十八以降で、『宇治拾遺物語』との類話を比べてみることにする。

2・4　三条中納言、食水飯語　第廿三（巻二十八）

（今昔）

今昔、三条ノ中納言ト①云ケル人有ケリ、②名ヲバ□トゾ云ケル。三条ノ右大臣ト③申ケル人ノ御子也。④身ノ才賢カリケレバ、唐ノ事モ此ノ朝ノ事モ⑤皆吉ク知テ、⑥思量リ有リ肝太クシテ、押柄ニナム有ケル。⑦亦笙ヲ吹ク事ナム極タル上手也ケル。⑧亦身ノ徳ナドモ有ケレバ、家ノ

（宇治）

今は昔、三条中納言といふ①人有けり。三条右大臣の③御子なり。④才かしこくて、もろこしのこと、此の世のこと、⑤みな知り給へり。⑥心ばへかしこく、きもふとく、おしからだちてなんおはしける。⑦笙の笛をなんきはめて吹給ける。

内モ豊也ケリ。
⑨長高クシテ大ニ太テナム有ケレバ、太リノ責テ苦シキマデ⑩肥タリケレバ、⑪医師和気ノ□ヲ呼テ、「此ク極ク太ルヲバ、何ガセムト為ル。起居ナド為ルガ、身ノ重クテ極ク苦シキ也」ト宣ケレバ、⑫□ガ申ケル様、「冬ハ湯漬、夏ハ水漬ニテ御飯ヲ可食也」ト。

⑬其ノ時六月許ノ事ナレバ、

⑮中納言□ヲ
⑯「然バ暫ク居タレ、
水飯食テ見セム」ト宣ケレバ、⑰
⑱□宣フニ随テ候ケルニ、中納言侍ヲ召セバ、侍一人出来タリ。
⑲中納言、「例食フ様ニシテ、水飯持来」ト宣ヘバ、侍立ヌ。
暫許有テ、

御台片□ヲ持参テ、御前に居ヘツ。
台ニハ箸ノ台ニ許ヲ居ヘタリ。次キテ侍盤ヲ捧テ持来ル。□ノ侍台ニ居フルヲ見レバ、㉑中ノ甕ニ㉒白キ干瓜ノ三寸許ナル、不切ズシテ十許盛タリ。
㉓亦中ノ甕ニ鮨鮎ノ㉔大キニ広ラカナルヲ、尾頭許ヲ押テ、三十許盛タリ。大キナル鋺ヲ具シタリ。皆台ニ取リ居ヘツ。

㉕亦一人大キナル銀ノ提ニ㉖大キナル銀ノ匙ヲ立テ、重気ニ持テ㉗前ニ居タリ。
㉘然レバ中納言鋺ヲ取テ、侍ニ給テ、「此レニ盛レ」ト宣ヘバ、侍匙ニ飯ヲ救ツツ、高ヤカニ盛上テ、喬ニ水ヲ少シ入テ㉙奉タレバ、

⑨長たかく、大にふとりてなんおはしける。ふとりのあまり、せめてくるしきまで⑩肥給ければ、⑪薬師重秀をよびて、「かくいみじうふとるをば、いかがせむとする。たちゐなどするが、身のおもく、いみじうくるしきなり」とのたまへば、⑫重秀申やう、「冬は湯づけ、夏は水漬にて、物をめすべきなり」と申けり。

⑭そのままにめしけれど、ただおなじやうに肥ふとり給ければ、せんかたなくて、
⑮又重秀をめして、
⑯「いひしまゝにすれど、そのしるしもなし。
水飯食て見せん」とのたまひて、⑰
⑱をのこどもめすに、侍一人参りたれば
「例のやうに、水飯してもて来」といはれければ、
しばしばかりありて、
⑳御台もて参るをみれば、
御台かたがたよそひもてきて、御前に据ゑつ。御台に、はしの台斗据ゑたり。つづきて、御盤ささげて参る。御まかなひの、台に据うるをみれば、㉑御盤に、㉒しろき干瓜、三寸ばかりにきりて、十ばかり盛りたり。
亦、すしあゆの、㉔おせくくに、ひろらかなるが、しり、かしらばかり押して、三十ばかり盛りたり。大なるかなまりを具したり。みな、御盤に据ゑたり。
㉕いま一人の侍、大なる銀の提に、銀のかいをたてて、重たげにもて㉗参りたり。
㉘金鞠を給たれば、
かいに御物をすくひつつ、高やかにもりあげて、そばに水をすこし

㉚中納言台ヲ引寄テ、鋺ヲ持上給ヌルニ、然許大キナル手ニ取納ヘルニ、大キナル鋺カナト見ユルニ、気シクハ非ヌ程ナルベシ。

先ヅ干瓜ヲ三切許ニ食切テ、㉛三ツ許食ツ。

次ニ鮨鮎ヲ二切許ニ食切テ、五ツ六ツ許安ラカニ㉜食ツ。

次ニ水飯ヲ引寄せテ、二度許箸迴シ給フト見ル程ニ、㉝飯失ヌレバ、

「亦盛レ」トテ、鋺ヲ指遣リ給フ。

㉞さて二三度に、提の物皆になれば、又提に入て、もて参る。

㉟重秀、これをみて、「水飯を、やくとめすとも、此ぢやうにめさば、更に御ふとり㊲直るべきにあらず」とて、㊳逃ていにけり。

入て㉙参らせたり。

㉚殿、盤をひきよせ給て、かなまりをとらせ給へるに、さばかり大におはする殿の御手に、大なるかなまりかなと見ゆるはけしうはあらぬほどなるべし。

干瓜三きりばかり食ひきりて、

㉛五つ六ばかり参りぬ。次に、鮎を二きりばかりに食ひきりて、五六ばかり、やすらかに㉜参りぬ。

つぎに、水飯を引よせて、二度ばかり箸をまはし給ふと見るほどに、㉝おものみな失せぬ。

「又」とて、さし給はす。

㉞さて二三度に、提の物皆になれば、又提に入て、もて参る。

㉟重秀、これをみて、「水飯を、やくとめすとも、此ぢやうにめさば、更に御ふとり㊲直るべきにあらず」とて、㊳逃ていにけり。

㊴後二人ニ語テナム咲ケル。

然レバ㊵此ノ中納言、㊶弥ヨ太リテ、相撲人ノ様ニテゾ㊷有ケルトナム語リ伝ヘタルト也。

さればいよいよ㊶相撲などのやうにてぞ㊷おはしける。

『今昔物語集』の文章を上段に、『宇治拾遺物語』の文章を下段に並べたのは従前どおり。

次に、細部にわたってその文章の相違をおさえてみる。

① 今昔では「云ケル人有ケリ」だが、宇治では「いふ人有けり」である。「云ケル」という表現は、今昔にしても、宇治にしても珍しいものである。

② 今昔では「名ヲバ□トゾ云ケル」が存在するが、宇治にはない。宇治では名前などどうでもよいという意識があったかと思われる。

③ 今昔では「申ケル人ノ御子也」とあるが、宇治では「御子なり」のみである。

④ 今昔では「身ノ才賢カリケレバ」と接続助詞「バ」を用いるが、宇治では「才かしこくて」と接続助詞「て」を使う。

⑤ 今昔では、「皆吉ク知テ」と接続助詞「テ」で次に続けるが、宇治は「みな知り給へり」で終止する。

⑥ 今昔では「思量り有り」となっているが、宇治では「心ばへかしこく」である。「思量り」ではかたい表現なので「心ばへ」とかえたのであろうか。また今昔では「有ケル」だが、宇治では「おはしけ

る」と尊敬語を用いている。

⑦ 今昔では「笙ヲ吹ク事ナム極タル上手也ケル」と、漢文訓読調であるが、宇治では「笙の笛をなんきはめて吹給ける」と改められている。

⑧ 今昔には「亦身ノ徳ナドモ有ケレバ、家ノ内モ豊也ケリ」が存在するが、宇治にはない。考えてみれば、説話の面白味という点からは、この部分はなくてもよい。今昔に存在し、宇治に存在しない部分、これらをまとめて考察を加えれば、宇治の規範意識というものが、ある程度明らかになるのではないかと考えている。

⑨ 今昔は「長高クシテ」と接続助詞「シテ」が使われるが、宇治は連用中止法「長たかく」が用いられる。また今昔の「有ケレバ」に対し、宇治は「おはしける」と敬語が使われている。

⑩ 今昔は「肥タリケレバ」と無敬語だが、宇治は「肥給ければ」と尊敬語を使っている。

⑪ 今昔では「医師和気ノ□」となっているが、宇治は「薬師重秀」である。

⑫ 今昔の「申ケル様」に対し、宇治は「申やう」であって、過去の助動詞が存在しない。

⑬ 今昔の「其ノ時六月許ノ事ナレバ」は宇治にはない。「水飯」が出現することを考えると、この部分、まったくの無意味ではないのだが、かといって積極的に肯定もできない。要するに、今昔は説明調なのである。

⑭ この部分は、宇治にのみ存在する。これは話を面白くするための宇治の創作と見るのが妥当であろう。今昔との滑稽度の相違が明らかである。今昔になくて宇治に存在する部分は、滑稽味を加えるという宇治の規範意識によるところ大と言えるのである。

⑮ 今昔の表現、やや不明瞭である。その点、宇治はわかりやすい。

⑯ この部分、位置的には対応するのだが、内容的にはまったく対立する。これは⑬、⑭での今昔と宇治との相違がそのままもちこまれたものである。

⑰ 今昔は「宣ケレバ」と接続助詞「バ」、宇治は「のたまひて」と接続助詞「て」が使われている。

⑱ 「□宣フニ随テ候ケルニ」は、⑯をうけた表現で、当然のことながら宇治には存在しない。また今昔は「侍一人出来タリ」で言い切りであるが、宇治は「侍一人参りたれば」と接続している。

⑲ 今昔の「中納言」は宇治には存在しない。

⑳ 宇治の「御台もて参るをみれば」は今昔には存在しない。余分事のようにも見られるが、存在した方が、やはり活き活きとするようである。

㉑ 「中ノ甕」と今昔にはあるが、宇治では「御盤」とかえられている。「中ノ甕」が古い語のためであろう。

㉒ 今昔には「三寸許ナル、不切ズシテ十許盛リタリ」とあるが、宇治では「三寸ばかりにきりて、十ばかり盛りたり」となっている。宇治の方が活き活きとしていること、⑳と同じである。

㉓ 今昔の「中ノ甕」は宇治には存在しない。これは㉑と同じく、古い語のために宇治では用いられなかったものと思われる。

㉔ 今昔では「大キニ」だが、宇治では「おせくくに」となっている。「おせくくに」という語義は不明で、現段階ではどちらがどうのとは言えないのだが、宇治の「おせくくに」の方が俗語で、かつ描写が活き活きとなされているだろうことが推測される。

㉕ 今昔の「亦一人」が、宇治では「いま一人の侍」となっている。

㉖ 今昔の「大キナル」という修飾語が、宇治には存在しない。

㉗ 今昔の「前ニ居タリ」が宇治では「参りたり」となっているが、これは明らかに宇治の改変の方が活きている。

㉘ 今昔では「然レバ中納言鋺ヲ取テ、侍ニ給テ、『此レニ盛レ』ト宣ヘバ、」とあるが、宇治では「金鞠を給たれば」のみ。

㉙ 今昔では「奉タレバ」と「奉ル」という謙譲語が使われ、さらに接続助詞「バ」によって次に続いていく。ところが宇治では「参らせたり」と言い切りにし、謙譲語も「参らす」になっている。

㉚ 今昔の「中納言台ヲ引寄テ」が宇治では「殿、盤をひきよせ給て」になっている。宇治には尊敬語が使われている。

㉛ 今昔においては「三ツ許食ツ」だが、宇治では「五つ六ばかり参りぬ」である。今昔で、「三切許ニ食切テ、三ツ許食ツ」となっているところが宇治では気にいらなかったものと思われる。

㉜ 今昔では「食ツ」と無敬語だが、宇治では「参りぬ」と尊敬語が使われる。宇治の方がより敬語を使う傾向にあったろうことは確かである。

㉝ 今昔の「飯失ヌレバ」が宇治では「おものみな失せぬ」となっている。今昔が文を続けていく傾向があるのに対し、宇治は切っていく方向である。

㉞ 宇治にのみこの部分は存在する。これは宇治の脚色である。これがあることによって中納言の大食ぶりが明白になるのである。

㉟ 今昔では「其ノ時ニ□」、宇治では「重秀、これをみて」である。あたりまえのことだが、宇治の方がわかりやすい表現である。

㊱ 今昔の「ダニ」は本来、類推の副助詞。しかし、ここに用いられるのは、文脈上誤りであり、宇治の偏者はそれに気がついたためはぶいたものと考えられる。今昔の誤りを正そうというのも宇治の規範意識の一つである。

㊲ 今昔の「止マル」が宇治では「直る」。これは語の問題。今後、「止マル」と「直る」の違いについて考えてみたいと思っている。

㊳ 今昔は「逃テ去テ」と次に続けていく。宇治は「逃ていにけり」と言い切る。これも既に判明していた傾向である。

㊴ この部分、今昔のみ。この部分は文脈上、存在しなくともよい、というより存在しないほうがいい。存在しないほうが、より笑いをさそうのである。宇治ではぶかれたのは当然と言えようか。

㊵ 「此ノ中納言」は、宇治には存在しない。

㊶ 今昔は「弥ヨ太リテ」と記されるが、宇治では「いよいよ」でとまってしまう。

㊷ 今昔の「有ケルトナム」が、宇治では「おはしける」となっている。宇治が敬語を使う傾向にあることは既に明らか。また今昔は「語リ伝ヘタルト也」で終わることは自明。

2・5 左京属紀茂経、鯛荒巻進太夫語第三十（巻二十八）

（今昔）

今昔、左京ノ大夫□ノ□ト云フ、①旧君達有ケリ。

年老テ極ク②旧メカシケレバ、③殊ニ行キモ不為デ、下辺ナル家ニナム籠リ居タリケル。

而ルニ、其ノ職ノ属ニテ、紀ノ茂経ト云フ者有ケル。長岳ニナム住ケル。

其ノ職ノ属ナレバ、彼ノ大夫ノ許ニ時々行テナム棍ケル。

而ル間、茂経、宇治殿ノ④盛ニ御マシケル時ニ参テ、贄殿ニ居タル程ニ、⑤淡路ノ守源ノ頼親ノ朝臣ノ許ヨリ鯛ノ荒巻ヲ多ク奉タリケルヲ、⑥贄殿ニ多ク取置ケルニ、贄殿ノ預□ノ義澄ト云フ者ニ、茂経其ノ荒巻ヲ三巻乞取テ、「⑦我ガ職ノ大夫ノ君ニ、此レ奉テ棍リ申サム」ト云テ、

此ノ荒巻三巻ヲ間木ニ棒置テ、義澄ニ云、「⑧此荒巻三巻、人ヲ以テ取リニ奉ラム時ニ遣ハセ」ト云置テ、

義澄ハ殿ヲ出テ、左京ノ大夫ノ許ニ行テ見レバ、大夫ハ出居テ、客人二三人許来タリ。

大夫、其ノ主セムトテ、⑩九月ノ下旬許ノ程ドノ事ナレバ、

地火爐ニ火□ナドシテ、

物食ハムト為ルニ、墓々シキ魚モナシ、鯉鳥ナドモ用有気也。

其レニ、茂経指出テ申ス様、

（宇治）

今は昔、左京の大夫なりける①古上達部ありけり。

年老て、いみじう②ふるめかしかりけり。

しもわたりなる家に、③ありきもせで籠居たりけり。

そのつかさの属にて、紀用経といふ者有けり。長岡になん住ける。

つかさの属なれば、此大夫のもとにも来てなんをとづりける。

この用経、大殿に参りて、贄殿にゐたる程に、⑤淡路の守頼親が、鯛のあら巻を多くたてまつりたりけるを、⑥贄殿にもて参りたり。贄殿のあづかり、よしずみに、二巻用経こひとりて、

まきにささげて置くとて、よしずみに云やう、「⑧これ、人してとりに奉らん折に、おこせ給へ」といひ置く。

⑨心の中に思けるやう、これわがつかさの大夫にたてまつりて、音づり奉らんと思て、

これをま木にささげて、

左京の大夫のもとにいきてみれば、かんの君、出居にまらう人二三人ばかり来て、

あるじせんとて、

地火爐に火おこしなどして、

我もとにて物くはむとするに、はかばかしき魚もなし。鯛、鳥などやうありげ也。

それに、用経が申やう、「用経

「茂経ガ許ニコソ⑪摂津ノ国ニ候フ下人ノ鯛ノ荒巻四五巻許、今朝⑫持来リテ候ツルヲ、

⑬一二巻ハ宿ノ童部ト共ニ食ベ試候ツルニ、艶ズ微妙ク鮮カニ候ヒツレバ、

今三巻ハ穢シ不候ハズシテ置テ⑭候ツルヲ、忿テ⑮罷リ出デ候ツル程ニ、下人ノ不候シテ、否持参リ⑯不候ザリツルニ、

只今取ニ遣サムハ、何ニ」ト音ヲ捧テ、シタリ顔ニ去張リテ、⑰口脇ヲ下ゲ、袖疏ヲシテ、延上テ申セバ、

左京ノ大夫、「可然キ物ノ只今無カリツルニ、糸吉キ事カナ。疾ク取ニ遣レ」と云フ。

客人共モ、「只今可然キ物ノ不候ザリツルニ、

⑱近来ノ美物ハ鮮ナル鯛ゾカシ。

がもとにこそ、津の国なる下人の、鯛のあら巻三つもて、⑫まうで来りつるを、

⑬一巻たべこころみ侍つるが、之もいはずめでたくさぶらひつれば、

今二巻は、けがさで置きて⑭さぶらふ。いそぎて⑮まうでつるに、下人の候はで、もて参り⑯候はざりつるなり。

唯今取につかはさんはいかに」と、声高く、したりがほに、袖をつくろひて、⑰くち脇かいのごひなどして、はやかりのぞきて申せば、

大夫「さるべき物のなきに、いとよき事かな。とくとりにやれ」とのたまふ。

まら人どもも、「くふべき物のさぶらはざめるに、

⑲九月ばかりの比なれば、

鳥ノ味ヒ糸弊シ、鯉ハタラ未ダ不出来ズ。然レバ、生キ鯛ハ極キ物ナナリ」ナド云合ヘリ。

然レバ、茂経、馬引カヘタル童ヲ呼ビ取テ、「其ノ馬ヲバ御門ニ繋テ、只今走テ⑲殿ノ贄殿ニ行テ、贄殿ノ預ノ主ニ、『其ノ置ツル荒巻三巻、只今遣セ給ヘ』ト云テ、取テ来」ト私語キテ、「走レ走レ」ト手搔テ遣ツ。

然テ、返リ参テ、「俎洗テ⑳持詣来」ト音高ニ云テ、「ヤガテ㉒今日ノ包丁茂経仕ラム」ト云テ、魚箸削リ、鞘ナル包丁刀取出シテ、打鋭テ、

「遅シ遅シ」ト云居タル程ドニ、遣ツル童ハ、糸疾ク木ノ枝ニ荒巻三巻ヲ結付テ捧テ、走テ持来タリ。

この比鳥のあぢはひいとわろし。鯉はまだいでこず。よき鯛は、奇異の物なり」などいひあへり。

用経、馬ひかへたる童をよびとりて、「馬をば御門のわきにつなぎて、ただいま走り、大殿に贄殿のあづかりの主に、『その置きつるあらまき、ただいまおこせ給へ』とささめきて、⑳ときかはさずもて来。ほかによるな。とく走れ」とてやりつ。

さて、「俎あらひて㉑もて参れ」と、こゑたかくいひて、やがて、㉒用経けふの庖丁は仕らん」と云て、まなばしけづり、さやなる刀ぬいてまうけつつ、

「㉓あなひさし。いづら、来ぬや」など、心もとながりゐたり。

「おそしおそし」といひゐたる程に、やりつる童、木のえだにあらまき二つゆひつけて、もてきたり。

㉔茂経此レヲ見テ、「哀レ、飛ガ如クニ詣来タル童カナ」ト云テ、俎ノ上ニ荒巻ヲ置テ、事シモ大鯉ナドヲ作ラム様ニ、左右ノ袖ヲ引疏テ、片膝ヲ立テ、今片膝ヲバ臥テ、極テ月々シク居成シテ、少喬ミテ、刀ヲ以テ荒巻縄ヲフツフツト㉘押切テ、刀シテ藁ヲ押披タルニ、

㉙物共泛レ落ツ。見レバ、平足駄ノ破タル、旧尻切ノ壊タル、旧藁沓ノ切タル此様共ホロホロト泛レ出ヅ。

茂経此レヲ見ママニ□テ、魚箸モ刀モ打奇テ立走テ、沓モ不履敢ズ逃ヌ。

㉚左京ノ大夫モ客人共モ、奇異ク目口開テ居タリ。前ナル侍共モ□テ、此モ彼モ云フ事無シ。物食ヒ酒呑ツル遊共、興モ無ク成テ、皆冷ジク成ヌルハ、独立ニ立テ皆去

㉕「いとかしこく、あはれ、とぶがごと走りて、まうで来たる童かな」とほめて、とりて、まな板のうへにうち置きて、㉖ことごとしく、大鯉つくらんやうに、左右の袖つくろひ、㉗くくりひきゆひ、かた膝たて、今かた膝ふせて、いみじくつきづきしくゐなして、あらまきのなはを押しきりて、刀して藁を押しひらくに、

㉙ほろほろと物どもこぼれておつる物は、ひらあしだ、ふるしきれ、ふるわらうづ、ふるぐつ、かやうのもののかぎりあるに、用経あきれて、刀も、まなばしもうち捨て、沓もはきあへず、にげていぬ。

㉚

①今昔の「君達」が、宇治では「上達部」になっている。

②今昔では、「旧メカシケレバ」であって、接続助詞「バ」によって次に続いていくが、宇治では「ふるめかしかりけり」と言い切りになっている。

③この部分、今昔と宇治では置かれた場所が異なる。

④今昔の「盛ニ御マシケル時ニ」が、宇治には存在しない。考えてみれば、この語句の必然性はない。不必要なものは捨てさる、この発想でいくのが宇治なのである。

⑤今昔には「頼親ノ朝臣ノ許ヨリ」と、たいそう固い表現だが、宇治では「頼親が」と簡略化されている。

⑥今昔では「贄殿ニ多ク取置ケルニ」と、静的な表現である、宇治では「贄殿にもて参りたり」と、動的な表現になっている。

⑦「我ガ職ノ大夫ノ君ニ、此レ奉テ棍リ申サム」という今昔の部分は宇治には記されない。

⑧今昔には「荒巻三巻」があるが、宇治にはない。ない方が意味の通じる上に、より会話的な感じをうける。また今昔では「遣ハセ」と無敬語なのだが、宇治では「おこせ給へ」と尊敬語が用いられている。

⑨これは、よしずみの心中。宇治には存在するが、今昔には見られない。

⑩今昔の「九月ノ下旬許ノ程ドノ事ナレバ」は、宇治ではずっと後

に「九月ばかりの比なれば」となっておかれている。今昔の位置を何故そこまで動かされねばならなかったのか、これは他の類例とともに、あわせて検討しなくてはならない問題である。

⑪ 今昔は「摂津ノ国ニ候フ下人」であるが、宇治は「津の国なる下人」とあり、いわゆる和文としてならば宇治の表現の方が普通である。今昔では「候フ」と敬語が使われているが、今昔の敬語法も、それはそれとして追及されなければならないテーマだと思っている。

⑫ 今昔では「持来リテ候ツルヲ」と丁寧語が使われるが、宇治では「まうで来りつるを」と謙譲語が用いられる。

⑬ 今昔は「一二巻」、宇治は「一巻」。これは今昔に「宿ノ童部ト共ニ」とあることによっておこった相違であろう。また、今昔は「候ツルニ」と、丁寧語に「候フ」を用いるが、宇治では「侍つるが」と、丁寧語「侍り」を使う。

⑭ 今昔は「候ツルヲ、」と接続助詞「ヲ」でもって次に続いていくが、宇治は「さぶらふ」と言い切りになっている。

⑮ 今昔の「罷リ出デ候ツル程ニ」が、宇治では「まうでつるに」と簡略化されている。

⑯ 今昔では「候ザリツルニ、」と次に接続助詞「ニ」によってつながっていく。宇治では例によって「候はざりつるなり」と言い切りになっている。

⑰ 今昔では、単に「口脇ヲ下ゲ」だが、宇治では「くち脇かいのごひ」と記される。宇治の方が活き活きとしていること、言うまでもない。

⑱ 今昔のこの部分、「近来ノ美物ハ鮮ナル鯛ゾカシ」は宇治には存在しない。

⑲ 今昔の「殿ノ贄殿ニ行テ」は宇治には存在しない。なくても話は充分通じるし、ない方が活き活きとしていること、従前どおりである。

⑳ 宇治の「ときかはさずもて来。ほかによるな」は、今昔には存在しない。これは宇治の創作であって、会話が活きること、もちろんである。

㉑ 今昔は「持詣来」であるが、宇治は「もて参れ」。これは今昔における敬語の問題としてとらえておきたい。

㉒ 今昔は「今日ノ包丁茂経仕ラム」、宇治は「用経けふの庖丁は仕らん」であり、語順が異なる。これは文構成の問題としてとらえておく。こういう例が積み重ねられれば、今昔と宇治の文章の個性というものがかなり明確になると考えられる。

㉓ 宇治の「『あなひさし。いづら、来ぬや』など、心もとながりゐたり」は今昔には存在しない。これは宇治の創作であって、活き活きと心中を表現する結果になっているのである。

㉔ 今昔の「茂経此レヲ見テ」は、宇治にはない。なくてもはぶけるものは、はぶく、無駄なものは記さないというのが、宇治の本質である。

㉕ 宇治の「いとかしこく」は、今昔には存在しない。

㉖「ことごとしく」は宇治には見られるが、今昔にはない。

㉗ ㉖に同じ。宇治には見られるが、今昔には存在しない。このように今昔の文をもととして付加された宇治の語句は、宇治を特徴たらしめるものであるので注目したい。

㉘ 逆に、「フツフツト」が今昔にはあるのに、宇治には存在しない、このような例もある。これらを比較対照して整理する必要があることを痛感する。

㉙ 今昔では「物共泛レ落ツ、」と一度言い切り、そして「見レバ」と続けていくのだが、宇治では「ほろほろと物どもこぼれておつる物は」と、以下に連続していく表現を選んでいる。また「ほろほろと」という擬態語は宇治にはあるのに、今昔にはない。このように擬態語の有無、改変の有無を考えてみても両者の相違が明らかにされることであろう。

㉚ この長文が、宇治にはまったく存在しないのである。この部分は、落語で言えば、オチのあとに来るもの。オチを説明したり、あるいはオチがあるにもかかわらず、さらに話が続いていくというのは考えてみれば変なものである。そこらへんを宇治の編者は計算にいれたのであろう。

2・4、2・5は、類話といって、かなり話の内容が似通っているものであって、それゆえに比較対照が、わりあいに容易なのだが、類話に近いが、比較が困難といわれる話も、もちろん存在する。そのような例は、比較が困難だといって投げだしておくのは、これまたたやすいことではあるが、それではいつまでたっても今昔と宇治との関係を明確化できない。そこで、今回から参考として、そのような例も載せておくようにしたい。

参考・1　穀断聖人、持米被咲語第廿四（巻二十八）

（今昔）

今昔、①文徳天皇ノ御代ニ、波太岐ノ山ト云フ所ニ聖人有ケリ、穀ヲ断テ②年来ヲ経ニケリ。天皇此ノ由ヲ聞食テ、召出シテ、神泉ニ被居テ、③帰依セサセ給フ事無限シ。

④此ノ聖人永ク穀ヲ断タル者ナレバ、木ノ葉ヲ以テ食トシテナム有ケル。

而間、⑤若ク勇タル殿上人ノ物咲スル、数、「⑥去来行テ、彼ノ穀断ノ聖人見ム」ト云テ、⑦彼ノ聖人ノ居タル所ニ行ヌ。

⑧聖人ノ極ク貴気ニテ居タルヲ見テ、

（宇治）

昔、

①久しくおこなふ上人ありけり。五穀を断て②年来に成ぬ。帝、聞食て、神泉にあがめ据ゑて、③殊に貴み給ふ。

④木葉をのみ食ける。

⑤物笑するわか公達あつまりて、

⑥「この聖の心みん」とて、

⑦行むかひてみるに、いと貴げにみゆれば、

⑨殿上ノ人共礼拝シテ、問テ云、
「聖人、穀ヲ断テ何年セニ成給ヒヌ、⑩亦、年ハ何ニカ成給フ」ト。
⑪聖人ノ云ク、
⑫「年既ニ七十ニ罷成タルニ、若ヨリ穀ヲ断タレバ、五十余年ニハ罷リ成ヌ」ト云フ、聞テ、
一人ノ殿上人忍テ云ク、
「穀断ノシタル屎ハ何様ニカ有ラム、例ノ人ノニハ不似ジカシ、去来行テ見ム」ト云合セテ、二三人許厠ニ行テ見レバ、米ヲ多ク□量タリ。
此レヲ見テ、「⑬穀断ハ争デ此クハ可為キヅ」
ト怪ビ疑ヒテ、
⑭聖人ノ居所ニ返リ行タレバ、聖人白地ニ立去タル間ニ、
居タル畳ヲ引返シテ見レバ、
⑯板敷ニ穴有リ、
下ニ土ヲ少シ堀タリ。

「穀断ちいくとせばかりになり給ふ」と問はれければ、
「若より断ち侍れば、五十余年にまかりなりぬ」といふを聞きて、
一人の殿上人のいはく、
「穀断ちの糞はいか様にか有らん。例の人にはかはりたるらん。いで行てみん」といへば、二三人つれて行て見れば、穀糞をおほく痢置たり。
あやしと思て、
⑭上人の出たるひまに、
⑮「居たるしたを見ん」といひて、
畳の下を引あけてみれば、
土を少堀て、

⑰怪シト思テ吉ク見レバ、
布ノ袋ニ白キ米ヲ包テ置タリ。
⑱殿上人共此ヲ見テ、
⑲「然レバヨ」ト思テ、畳ヲ本如ク敷テ居ルニ、聖人返ヌ。其ノ時ニ殿上人共頬咲テ、
「米屎ノ聖米屎ノ聖」ト呼喧テ咲ケレバ、
⑳聖人恥テ逃テ去ケリ。
其ノ後、行ケム方ヲ人不知ズシテ止ニケリ。
㉑早ウ、人の謀テ被貴ムトテ思テ蜜ニ米ヲ隠シテ持リケルヲ不知シテ、穀断ト知テ、天皇モ帰依セサセ給ヒ人モ貴ビケル也ケリトナム語リ伝ヘタルト也。

布袋に米をいれて置たり。
⑱君達みて、
⑲午をたたきて、
「穀糞聖穀糞聖」と呼はりて、のしり笑ければ、
逃さりにけり。
其後は行方もしらず、長うせにけりとなん。

この話、一見して今昔と宇治の間にはなはだしい相違がうかがえる。それは何かというと、分量の違いなのである。宇治の分量は、今昔のそれの半分ほどである。
ところが、ここで注目すべきなのは、分量が半分ほどになったとは言え、ストーリイの展開には、大体において異なるということはない、ということである。

① 今昔では「文徳天皇ノ御代ニ、波太岐ノ山ト云フ所ニ聖人有ケリ」となっているが、宇治では「久しくおこなふ上人ありけり」のみ。もちろんこれは、宇治の簡略化ということで説明はつくのだが、宇治にしてみれば、もはや「文徳天皇」だの、「波太岐ノ山」だのはどうでもよかったのであろう。仏教説話が、世俗説話へとむく傾向にある時には、このようなかたくるしい部分は積極的にカットされるのである。

② 今昔の「年来ヲ経ニケリ」が、宇治では「年来ニ成ぬ」となっている。表現の変遷として注目しておきたい。

③ 今昔では「帰依セサセ給フ事無限シ」だが、宇治では「殊に貴み給ふ」である。今昔がかたくるしいのは、①に同じ。また「〜事無限シ」という慣用表現を捨てさった点にも注目しておきたい。

④ 今昔は「此ノ聖人永ク穀ヲ断タル者ナレバ、木ノ葉ヲ以テ食トシテナム有ケル」と説明的だが、宇治では「木葉をのみ食ける」とさらりとながしている。

⑤ 今昔では「若ク勇タル殿上人ノ物咲スル」であるが、宇治では「物笑するわか公達あつまりて」となっている。今昔が説明的であるということは従前通り。

⑥ 今昔は「去来行テ、彼ノ穀断ノ聖人見ム」だが、宇治は「この聖の心みん」と、やはりさらりとながしている。

⑦ 今昔は「彼ノ聖人ノ居タル所ニ行ヌ」となっているが、宇治では「行むかひてみるに」のみ。「彼ノ聖人」などという指示語はあまり重ねて用いない、これが宇治の規範意識の一つである。

⑧ 今昔には「聖人ノ」がある。これは⑦と同じレベルである。

⑨ 今昔では「殿上ノ人共礼拝シテ、問テ云、」と長々しい説明があるが、宇治にはない。もちろんストーリイの展開に必ずしも必要というものではないのである。

⑩ 今昔の「亦、年ハ何ニカ成給フ」は、宇治には存在しない。思えば、この話では聖人の年令がどうのというのはあまり問題ではないのだった。宇治がはぶいたのも納得させられる。

⑪ 今昔の「聖人ノ云ク」は、宇治には存在しない。これは、⑦、⑧と同じ。宇治では重ねて指示語を使うということは嫌う傾向にあるのである。

⑫ 今昔の「年既ニ七十ニ罷成タルニ」は、宇治には見られないのだが、これは⑩と関連するものである。

⑬ 今昔には「穀断ハ争デ此クハ可為キヅ」が存在するが、宇治にはない。これもない方が、話のテンポとしてはよい。

⑭ 今昔では「聖人ノ居所ニ返リ行タレバ、聖人白地ニ立去タル間ニ」と長々しい説明があるが、宇治は「上人の出たるひまに」とポイントのみわかりやすく示す。

⑮ 「『居たるしたを見ん』といひて」は、宇治のみに存在。宇治で会話を付加するのはどのような場合かを考えるのも重要なことの一つである。

⑯ 「板敷ニ穴有リ」は今昔のみ。これがあると、がぜん説明調にな

ってくる。無論、板敷に穴があるからこそ土にうめられるわけなのだが、これはなくても土の描写をすればすむこと。そこで、宇治ではぶかれたものと推定される。

⑰ 今昔の「怪シト思テ吉ク見レバ」は、宇治には存在しない。

⑱ 今昔では、「殿上人」、宇治では、「君達」となっている。これは語彙の問題。

⑲ 今昔は、「『然レバヨ』ト思テ、畳ヲ本ノ如ク敷テ居ルニ、聖人返ヌ。其ノ時ニ殿上人共頬咲テ」と長々と、畳をもとにもどしたことまで描写する、それが宇治では「手をたたきて」のみ。いずれにせよ、宇治が簡略な表現を好んだということははっきりしている。

⑳ 今昔の「聖人恥テ」は宇治には存在しない。人をさす語などは、あまりくりかえして用いないのが宇治の考えの基本なのである。

㉑ やむをえないことなのだろうが、以下の説明文は、今昔に存在するのみ。笑いとばすなら、宇治のやり方でよいのだが、今昔はやはり説話全体をまとめるという意識が強いのだ。これは仏教説話の名残りともいうべきもので、宇治は世俗説話として完成されてきたと判断する一証ともなろう。

3 おわりに

以上、二話プラス一話を比較対照し、検討してきたが、今昔が説明調であるのに対し、宇治はその簡略化をめざすということが、おおむね言えるようである。かたくるしい説話から、笑いの説話へと移行している様子が随所にうかがえたが、今回も最終的な結論はさしひかえ、さらに続けて研究をおしすすめるつもりである。

本稿は昭和五十六年度特別研究費の助成を受けたものである。